

「探検部魂、今も」

39代 OG 本多裕美子

1. 序

2007年、シルクロードの西のはずれ、パルミラ遺跡で迎える日没。紀元前1世紀から紀元後3世紀にかけて築かれた東西交易の要衝として築かれたオアシス都市の遺跡で夕日を眺めるのは、中東の国シリアで2年間暮らした中でも私のお気に入りの時間のひとつだ。

日中は激しく行きかう観光客、らくだ引きや物売り。日没になると、そんな喧騒がうそのように消えて、オアシスを囲むなつめやしの森が徐々に黒く沈み、砂漠の中にある遺跡に風が吹き抜ける音が聞こえる。一番星の輝きが増すまで、何千年も昔に栄えた街の礎石に横たわって目をつむると、遥か東の中国、タクラ

カン砂漠や海の向こうの日本まで、時間や空間を越えて繋がっているような不思議な気持ちになる。1995年、探検部現役時代に私が踏んだタクラマカン砂漠を通してパルミラに辿り着いた隊商もいたのかもしれない。

2. 現役時代

なぜ、探検部に入部したのだろう。

なぜ、タクラマカン沙漠踏破遠征に加わったのだろう。

小学2年生の頃に奈良の正倉院展で見たシルクロードを渡ってきたものの数々を見たときの驚きの記憶や、自然の中で過ごした子供時代の心地よい記憶が心の底にあり続けたからかもしれない。

それ以来、たまに忘れてしまっている期間もあったが、思い起こすといつも中央アジアや西アジアを中心とするユーラシアに魅かれてきた。現地に住む人々はどんな暮らしをしているのだろう。どんなことを考えているのだろう。そんな好奇心から史学・地理学科に進んでいたの、入学後暫くして

“文化人類学調査、ブラジ



シリア、パルミラ遺跡の夕暮れ

ル、ヤノミ族”という一文を見つけた後、気が付くと牛の頭蓋骨が入りにぶら下がっている薄暗くて雑然とした探検部の部室の前に立っていた。

入部してまもなくして、タクラマカン砂漠踏破遠征隊に加わっていた。私が遠征隊に加わってから約1年半後には諸先輩方やたくさんの方々に助けられて、遠征を無事に成功させることができた。松原先輩、野口先輩、田口先輩、香川先輩と事前準備をし、何度も探検委員会で御指導を頂き、最後に砂漠を歩いた1ヶ月間は今でも特別なものだ。1ヶ月間、大きな砂漠の懐に抱かれて、大自然の美しさと人間の手には及ばない偉大な力を感じたことが、史学・地理学科の中で、探検部顧問でもいらっしゃる木庭先生の自然地理学のゼミに入り、現在の仕事に繋がる“環境”や“開発”を考える契機となった気がする。

他方、遠征では、チームワーク、責任、努力…いろいろなことを学んだ。“遠征”は一つの大きな学びの経験ではあるが、これだけではなく“昼トレ”、“ガイエン”、“ボッカ”など、先輩や後輩と過ごした探検部での日常の日々が“好奇心の探究”、“夢・目標に向けて努力すること”、“仲間を信じて協力すること”などを教えてくれた気がする。

もちろん、4年間の探検部での時間は良いこと、きれいなことばかりではなかった。遠征の準備の中では何をやっても足りない気がする上、自分の遠征に行きたいという気持ちだけで回りの先輩の足を引っ張っているのではと数え切れなくらい悩んだ。それでも乗り越えられたのは先輩、同期のおかげである。

しかしながら、遠征から帰ってきて、次は残された時間で何をやっていこうかという悩みで過ぎていった。それでも、探検部の中で回りに触発されつつ、自分を見つめて自分なりのペースで前に進むともがいていた気がする。結局、私が遠征から帰ってきてから卒業という期限までには、探検部の中で進むべき明確な答えを出すことはできなかったが、その頃に悩んだこと、考えたことは現在の自分に繋がっている。



2 回生時、タクラマカン砂漠遠征で。中央アジアの人たちと交流する本多

3. 卒業後、現在

卒業して9年が経った今、発展途上国で環境や水資源の分野での国際協力に携わっている。

世界人口の5人に1人は1日1ドル以下という貧困生活をしている一方で、世界の資源の80%を世界の20%の人々が使っていると言われる。貧困、紛争、環境問題・・・様々な問題をかかえる途上国で、例えば、ごみ問題の改善、水や大気などの環境管理、上下水道の整備計画の策定を日本のODA(政府開発援助)で支援するプロジェクトの実施や途上国で必要とされる支援を技術協力プロジェクトとして形作っていく仕事に携わってきた。技術協力プロジェクトとは、相手に援助資金をあげておしまいというものではなく、日本から派遣される様々な分野の専門家が途上国の人に技術や知識を伝えて、一緒に問題を解決しながら、人を育てるプロジェクトである。そんな途上国の現場での仕事は、相手国政府機関、NGOなど色々な人と会って話を聞き、現場を見たり、関係する情報を収集したり、相手国が何を必要としているのかを知り日本が支援できることを調整してプロジェクトの原案を纏めたり、プロジェクト実施現場の状況を日本に発信したりすることである。

それ故、現場での仕事では相手の国の文化や考え方を知ること、現場で必要とされていることを理解することが基本である。そんな中で仕事

をしていると、その国のことをもっともっと知りたいという好奇心がムクムクと沸き始め、知れば知るほどその国のことが大好きになる。シリアではアジア系の顔を見ると、小ばかにしたように“チン・チャン・チョン”と囃し立てられて不快な気分になったりもするけれど、好きだから少々のは気にならず、“バカ”になれるくらい真っ直ぐにがんばろうと思えるのは、探検部のときにタクラマカンへの遠征に魅かれて突き進んだのと同じかもしれない。

私のこれまでの仕事の中では、ラオス、モロッコ・・・など短期的に関わった国もあるが、長期的に関わった南東欧の国々、アルバニア、ボスニア・ヘルツェゴビナ、マケドニア、セルビアそして中東の国シリアは、また私に新たな好奇心の種をくれた。十数年前は民族紛争をしていた国々や日本から見るといつもきな臭い感じがする中東の国々で、紛争がなく人々が平和に暮らすためにはできることは何だろう・・・と。



今や部きつての国際派も、10年前は外苑で砂を担いでました。真ん中が本多

4. さいごに

“探検部魂”とは、人それぞれによって解釈は異なるだろう。

私は、探検部魂の大切な根幹は“好奇心の探究”、“仲間を信じて協力すること”であると思う。私の好奇心は、探究する中で形を変えたり更に先に進んだりする。探究する方法は体力勝負で体当たりをしていた現役時代と現在では異なるが、これからも好奇心を失うことなく、仲間を信じて協力すること、“探検部魂”を持ち続けたい。

5. 後輩の皆さんへ

私は卒業してから日がたち、探検部から長く離れていますが、探検部で過ごした時間はいつも心の中で生きています。

それはきっと、私の大学生活4年間で一生懸命になって悩み、考え、自分自身を見つめる時間だったからのような気がします。きっと探検部に魅かれて活動をされている後輩の皆さんも何か得体の知れない魅力に引かれてやってきた人、物事に一生懸命になれる人だと思います。

4年間はあっという間です。例え4年の間に大きなことを成し遂げられなくとも、何か、例えば自然が好きだという気持ちがライフワークに結びつくかもしれません。日々、自分自身を見つめて、考えること、そして少しずつでも実行に移していくことで部を活性化させていって欲しいと願います。

最後になりましたが、稚拙な文章なが

ら「踏査 12号」に投稿する機会を下さりました探検部諸兄の皆様と編集を担当してくださった田口先輩に感謝いたします。

2007年夏
(39代OG)



いくつもの異国、異文化の中での仕事。探検部時代の体験が生きている

編集者注：本多さんはシリアでの任務を終え、現在はすでにロンドンへ旅立ったそうです。